

# 今、求められる「教養の中国史」とは

津田資久 井ノ口哲也 編著  
教養の中国史



A5判 372頁  
ミネルヴァ書房  
[本体 2,800円 + 税]

## 黨 武彦

「中国に対して偏見を持っていましたが、授業を通じ、それが一面的なものであることを学びました」。評者が大学一年生の授業を担当し、最終日に書かせる感想の常套の記述である。世紀の変わり目にものごころがついた世代にとつての中国へのイメージは、「中国の暗部を強調したマスコミ報道」（本書五頁）により、ほぼ例外なくマイナスからのスタートであり、我々中国研究者から異なる視点の話聞いて、ようやく中庸に至る、という状況である。評者も含む、本書の編者・執筆者以前の世代が、中国に対する憧れ先行のプラスイメージからスタート（そして現実の中国で苦労してゼロから再スタートする）していた時代とは隔世の感がある。本書の「はじめに」においても、「日本社会の中国への眼差しは冷え切っているように見える」とし、そのような状況下、一歩下がったところから

やや長めに歴史的経緯を俯瞰した「教養」部分を補完するため、一九七〇年前後生まれの中堅研究者の新しい切り口の叙述により、大学の初学者をはじめとして誰にでも知的に楽しめる中国史を提供しようという明確な目的をもって編集されたのが本書である。

本書は以下のような構成である。

はじめに

序章 中国史を学ぶということ

第1章 中華意識の形成——先秦史

第2章 専制国家体制の確立と拡大——秦代～前漢武帝期

第3章 儒家思想の浸透と外戚・宦官の専横——前漢中期

～後漢

第4章 〈貴族〉の盛衰と「天下」観の変容——三国・西晋・

南朝

第5章 草原から中華への軌跡——匈奴・五胡・北朝

第6章 中国的「美」の営み——仏教美術の道のり

第7章 礼教国家の完成と東アジア秩序——隋・唐

第8章 〈財政国家〉と士大夫官僚——唐後半期・五代・

北宋・南宋

第9章 ユーラシア大陸の「首都」北京——契丹(遼)・金・

元

第10章 伝統中国社会の完成——明・清

第11章 「富強」をめざして——清末・中華民国・中華人

民共和国

第12章 多様化する文学、漂泊する作家たち

第13章 現代中国案内——変貌する家族・生活・メディア

中国史略年表

以上に加え、「『正史』と王朝の正統性」「宦官」「歴代王朝における地方行政制度の変遷」「シルクロード」「科挙」「四書五経」「家族と宗族」「華僑・華人」「食文化」という九つのコラムからなる。編者も述べるように「四書五経」や「食文化」などはこれまでの歴史の概説書にはあまり類例が無い項

目だろう。

本書の特徴は、オーソドックスな通史に思想・文化史がバランスよく配置されていることである。各章ごとに恣意的ではあるが評者が特筆すべきと考えた部分を述べる。序章は、中国史を学ぶことの意義について強調し、中国の国情とそのルーツを多面的に把握し、日本人が自明とするものが、必ずしも世界ではそうではないという相対的な視点に立つことの重要性を説く。第1章の最終節「睡虎地秦簡の時代」は出土資料を丁寧に紹介し、その内容から中華が特定の国や地域に限定されるものではなく、主体によってさまざまな像を結ぶ複合的観念であった、という説明をしている点が興味深い。第2章も前章と同様出土簡牘の「二年律令」の記述から、『史記』などの文献と評価が異なる部分(秦と漢の律令の継承)や評価をより補完する部分(呂氏の特権)を描き出している。第3章は後漢を画期とするという執筆担当者の従来よりの見解を具体的な事例をもとに明示している。特に後漢以降に出土資料が激減する原因を探る考察は興味深い。第4章と第5章の記述は、編者も述べるように本書の大きな特色で、従来は南北朝時代と一括され、どちらかの視点で述べられることが多かったこの時代を、南朝と北朝それぞれの専門的知見から叙述する。第6章は、他の歴史概説書には無い内容であり、

仏教美術を通史的に見ることによって、中国的な「美の営み」をみごとに描き出している。第7章は隋唐帝国を「礼教国家」として位置づけている。手前味噌であるが評者は近年、清代の翰林官を「礼の聖職者」という位置づけでとらえようと試みている。その淵源をこの章の記述から見ることができると。第8章は、かつて宋代経済史の幸徹九州大学名誉教授が提唱し、評者も多大な影響をうけた宋代の南北経済交流を財政的物流と位置づけ、宋王朝を〈財政国家〉と評価する。第9章、北京を舞台にした契丹・金・元の歴史の叙述は、導入部分に概説書にふさわしく印象的で、本書が本来対象とする初学者への配慮がなされている。第10章は、北方民族との関係を軸に明清時代を論じる。類書では大きな割合を占める(例えば朝日出版社の地域からの世界史シリーズ『中国』上・下では二七%)明清時代の記述が、頁数にして六〇弱であることは本書の特色といえる。第11章は、前章と同様に類書では大きな部分を占める一八四〇年のアヘン戦争から一九八九年の天安門事件までの長いスパンの近現代史を対象としており、「富強」をキーワードに要を得た叙述となっている。第12章は、もともと政治や社会との結びつきが緊密な中国文学のうち、一九一七年の文学革命以降を叙述する。前章の近現代史の分量的な少なさを補完する位置づけもあるだろう。評者としては特に台

湾で活躍した日本人作家坂口梧子への言及が印象深い。第13章は、えてして歴代の共産党総書記の名前を連ね、「和諧社会」や「一带一路」などの政策構想などを述べがちなどころであるが、「小皇帝」「蟻族」「八〇後・九〇後」「小資」などの相応しいキーワードを用い、さらには日本では知られていないが中国では周知の「百家論壇」「超級女声」「抗日神劇・雷劇」などの興味を引くトピックを紹介し、現代中国への関心を引く叙述がおこなわれている。以上のように、それぞれの章の個別の記述と全体構成が非常に意欲的で類書にない個性を十分に発揮しているといえる。

また、図書館等で入手しやすい適切な参考文献がきちんとあげられていること、生没年がすべてについた人名索引、網羅的な書名索引が用意されていることも高く評価できる。煩瑣な事項索引が設けられなかったことは理解できるが、その補完として章をまたがって出てくる事項への「『頁参照』をもう少し丁寧につけていただければよりよかつたと思われる。地図などの図版も多く用意されており、理解の助けとなるが、章によっては縮尺の都合か字が小さく判読に難儀する箇所や、本文との対応のために入れられる「(図版1-1)」の位置に多少違和感を感じる箇所があった。

以上述べたように、本書の内容と構成にはまったく異議は

ないのであるが、一つ大きな論点としてかかげたいのは本書の題名である「教養の中国史」というタイトルのことである。本書のカバーのその中には「大学一―二年向けの教養科目テキスト」と記されており、大学のカリキュラムにおける教養教育にターゲットをあわせていることは明白である。ただ、本書を大学の教養教育のテキストとした場合、現在、どのくらいの学生がついてくることができらるだろうか。

本書の特徴は、気鋭の研究者が最新の研究成果をおしみなく披露している点である。ただ、内容を重視するあまりか、時に主語と述語が遠く離れる部分があったりするなど、日本語の文章表現がいくぶん生硬に感じられるところが多い。説明無しに唐突に細かい人名や専門用語が出てくる箇所もあり、おそらく中国史専攻の大学院生ぐらいであれば既知の知識を補いつつ読み進めることができるが、初学者には苦しい部分がある。宮崎市定『中国史』（岩波書店）の明晰さの境地には至らずとも、編者による思い切った文体の整理は必要だったかもしれない。

その他、気になる点は、「」（その他、凡例もないので区別不明のへ）や《》や《》が多用されていることである。中国史特有の歴史用語についている「」、例えば「上供」「御筆手詔」には違和感はない。ただ、「独自」「固有」など、辞

典的な意味とは違う用語法ですよ、という「」の使い方は、研究者の間では暗黙の修辭ともいえるが、大学一―二年生をを対象とした本書にはそぐわないのではないだろうか。

そういう意味で、本書は実は完成してみると、歴史学科あるいは文学・哲学を含んだ中国学関係学科の学生に「おさえておくべき中国史の教養」として、専門教育の概説科目で読ませるのに適しているのではないかと思われる。評者が分担執筆者として関わった『中国の歴史―東アジアの周縁から考える―』（有斐閣、二〇一五）も、対象を教養科目レベルとたたてはいるが、概説どころか特殊講義レベルの章が並ぶ結果となったというのが評者の正直な感想である。両書とも、編集方針とのズレは原稿がそろった時点で検証し、読者の対象を再検討する必要があったのではないかと思われる。

評者があげた以上のような課題は本書の意欲的な内容からすれば些末なことかもしれない。本書がより多くの読者に読まれ、我が国における中国学の「冬の時代」（本書六頁）が終わるひとつの契機となることを強く希望する。

（とう・たけひこ 熊本大学大学院人文社会科学部研究部）